

診療最前線

皮膚科

皮膚科は、皮膚に関する障害や病気の治療を行う専門科です。当院では、2名の医師で診療を行っています。赤ちゃんから高齢者まで、様々な年齢層の患者さんが訪れます。

皮膚科で扱う疾患は、湿疹・アトピー性皮膚炎・じんましんなどのアレルギー性疾患、**乾癬**・**掌蹠膿疱症**・**扁平苔癬**・**類天疱瘡**・**天疱瘡**などの炎症性皮膚疾患、**良性・悪性皮膚腫瘍**、**広範囲を除く熱傷**・**挫創**・**切創**など多岐にわたります。

オカルーア

乾癬のバイオ製剤治療

乾癬は、全身の皮膚にかさかさした赤い発疹を生じる皮膚疾患です。ときに関節症状を伴うことがあります。乾癬性関節炎と呼ばれるように見た目がよくないことから、患者さんの生活レベルに大きな影響を与えます。

乾癬の治療は、飲み薬や塗り薬のほか、紫外線治療なども行われています。しかし、なかなか

十分な効果が得られず、治療に難渋することが多いです。近年、乾癬に対する生物学的製剤（バイオ製剤）が使われるようになり、高い効果を発揮しています。当院は、このバイオ製剤による治療を積極的に手がけており、2013年11月時点で20名の患者さんが治療を受けられています。当院で使用している治療薬は2種類で、2週間おきに使う薬と3ヶ月おきに使う薬があります。おのおの効果が異なる



治療後 治療前
図1 尋常性乾癬（バイオ製剤治療）

り、治療目標も若干異なります。効果は極めて高いのですが、どちらの治療も高額であるため、ある程度の自己負担が必要になります。

アレルギーの診断と治療

皮膚はアレルギーが起りやすい臓器ですが、近年特に注目されているのが、皮膚を介して生じるアレルギーが増加していることです。某石けんにより小麦アレルギーを生じた事例が多発したことはご存じの方も多いでしょう。このほか、花粉症に関連して果物アレルギーになる方や、むき身作業を介してエビ・カニのアレルギーになる方などがいます。ハチに刺されてシヨックを起こし入院される方も年10名内外おられます。お薬のアレルギーで発疹が出る方も時々受診されます。

診断は、問診と検査で行いますが、検査は一般に行われている血液検査のほか、皮膚を利用したプリックテストや、負荷試験などを行うことがあります。検査のために1〜2泊程度の入院が必要になる場合があります。治療は抗アレルギー剤の内服を

中心に行いますが、急激に症状が出る可能性のある患者さんには、症状の進行を緩和して危険性を減らす効果のある自己注射製剤（商品名・エピペン）の処方も行います。

創傷治療

創傷治療も当科の特徴的な治療分野で、やけどや擦り傷などのキズに対し、消毒をせずに適切な保護材料で処置を行い、きれいに治すことを目標に取り組んでいます（図2）。ただし、広範囲熱傷は対象としておりません。また、キズの状態によっては後遺症が残る可能性もあります。（皮膚科部長 瀧澤好廣）



治療後 治療前
図2 創傷被覆材による治療